

特集

3

病気・障がいを抱える

子どもの学び

院内学級の 子どもたちの 学び支援 プロジェクト

重い病気を抱える子どもたちの学びを支援するため、
病院・院内学級と連携し、
ICTを活用した学びのモデルの開発に取り組んでいます。



“分身ロボット” OriHime で 子どもの学びの機会を広げる

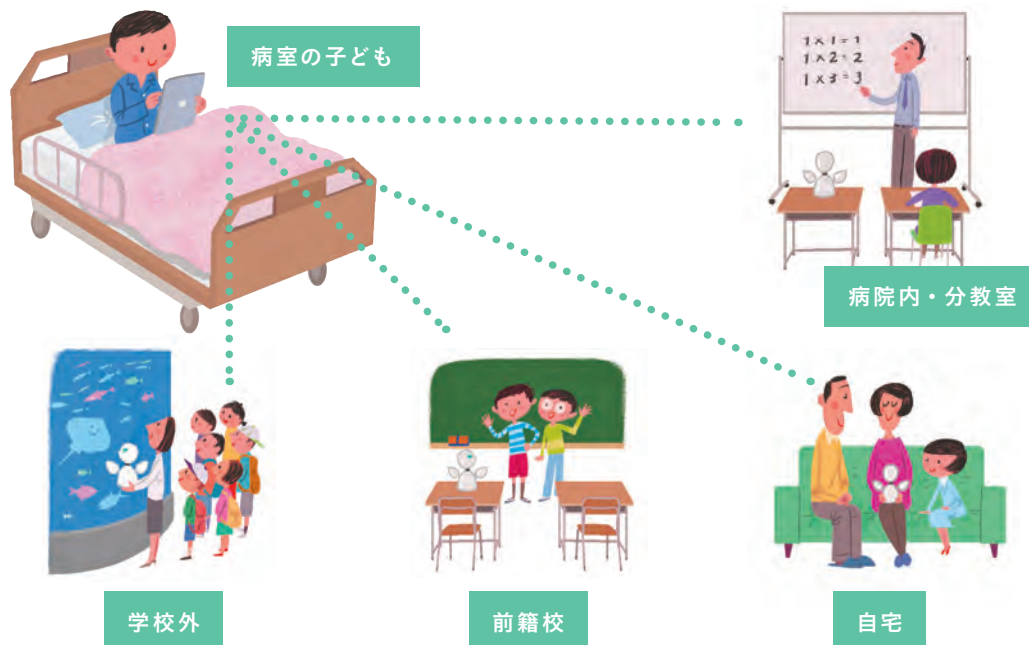
2015年6月から国立成育医療研究センター内の院内学級で学習・コミュニケーションをサポートするプロジェクトをスタートしました。株式会社オリィ研究所の“分身ロボット”OriHimeを使い、入院中で病室から出られない子どもと、院

内学級の先生や友人などをつなぎ、学びやコミュニケーションをサポートする活動に取り組んでいます。2016年度より、東京都内の特別支援学校4校にプロジェクトを広げ、活用事例を積み重ねながら、有効な学びのモデル創出を目指しています。

OriHime のしくみ

院内学級の教室などに置いたOriHimeを、インターネットを通じて病室のベッドサイドなどからタブレットで遠隔操作。カメラの視界を動かして自由に周りを見たり、手振りなどのジェスチャーを加えて会話をしたり、まるで自分の分身がそこにいるかのように、コミュニケーションを取ることができます。

自分の行きたい所に OriHime で行く！



ICTを使った病弱教育のモデルとなることを目指して

東京都教育委員会は、東京都特別支援教育推進計画に基づき、病気で入院している子どもたちの教育の一層の充実を図っています。この計画を受けて平成29年4月1日に、肢体不自由教育部門と病弱教育部門が併置された新しい形の特別支援学校として、都立光明学園が開校しました。本校は都内の病弱教育に関する重要な拠点となっています。

都の定める病弱教育の充実に向けた方針には「ICT機器の活用」が掲げられています。現在、本校では「本校」、「分教室」、「教員による自宅や病院への訪問」という3形態での教育を行っていますので、ICT機器の活用は学びの充実や拡充にとっても有効であり、そのモデルづくりは病弱教育の拠点である本校の使命だと捉えております。そういう意味でOriHimeを使ったこのプロジェクトは本校の使命に沿った

内容であり、取り組む意義も大きいと感じています。これまでは分教室での使用を主にしておりましたが、これからは訪問教育での活用も含め、実践事例を通して、子どもたちの学びにとって有効なICT活用のあり方を探っていきたいと考えています。

本校では「可能性の追求」を校訓として掲げています。本プロジェクトが、病気を抱える子どもたちに学びの機会を与え、その可能性を広げられる病弱教育のモデルとなり、取り組みが日本中に広がっていくことを期待しています。



東京都立光明学園
田村 康二郎 統括校長

院内学級プロジェクト参画校

・都立北特別支援学校
(東京大学医学部附属病院
内こだま分教室)

・都立小平特別支援学校
(国立精神・神経医療研究セ
ンター内武蔵分教室など)

・都立光明学園
(国立成育医療研究センター
内そよ風分教室など)

・都立墨東特別支援学校
(国立がん研究センター中央
病院内いるか分教室など)

CLOSE UP

OriHimeを使った学び支援の方法にはたくさんの可能性があり、各校にてさまざまな試みがされています。実際に子どもたちがOriHimeを使った時のエピソードをご紹介します。

EPISODE 1 複数の病院をつないで学びの機会を広げる

毎年、国立成育医療研究センター内そよ風分教室で開催される「狂言教室」に、今年度は都立墨東特別支援学校の生徒もOriHimeを使って参加しました。

成育医療研究センター内に入院している子どもたちは、普段病室のある病棟から歩いて分教室へ登校しています。しかし中には治療や体調によって病室から出られない子どももいますので、そういった子どもたちには病室からタブレットを操作して、分教室にあるOriHimeを操作して行事などに参加できるようにしています。

そよ風分教室では毎年、早稲田大学演劇博物館の協力によって、「狂言教室」を開催しています。今年度は、本プロジェクトに参画している他の病院に入院している子どもたちも一緒に鑑賞できるように、トライアルを行うことにしました。

当日は、そよ風分教室の児童のほか、東京慈恵会医科大学附属病院に転院している生徒、そして墨東特別支援学校のつばさ訪問学級に通う児童も遠隔参加をしました。会場内にはOriHimeが3体並び、初めてのOriHimeを使った複数校合同での行事となりました。

狂言の実演が始まると、舞台を広く使ったダイナミックな演技に引き込まれた子どもたちは、とても集中して鑑賞していました。狂

言の動きや鳴き声をまねする体験コーナーでは、OriHimeの手を動かしたり、マイクを通じて声を出したりして参加している様子が伺えました。最後に子どもたちから感想の発表などもあり、それぞれが得た学びを共有することができました。

今回OriHimeを使って複数の拠点をつなぐことで、離れていながらも授業や学校行事を共有できたことで、病気を抱える子どもたちにとっての学びの機会を広げられることが確認できました。



EPISODE 2 卒業式に向けてOriHimeで前籍校へ登校

入院前に通っていた学校（前籍校）での卒業式に出席することになっていた小学6年生のAくん。卒業式に向けて、OriHimeを使って前籍校の授業に参加し、登校の練習をしました。

治療が長期にわたる場合、病気を抱える子どもの入院先に院内学級があれば、その院内学級を設置している学校に、籍を移して通うことになります。治療が終わり退院することになれば、入院前に通っていた学校に、籍を戻すことができます。

入院に伴い2学期から墨東特別支援学校の訪問学級に通っていた小学6年生のAくんは、退院後の3月に控えた卒業式を、前籍校で出席することになりました。しかし、長期間前籍校に通っていなかったため、Aくんは「自分はクラスメートのみんなに忘れられてしまっているのでは」と、登校することに不安を感じていました。訪問学級の先生方はAくんの不安を和らげられる方法として、「Aくんの代わりにOriHimeに前の学校に行ってもらっては？」という提案をしました。Aくんは「やってみる！」ととても前向きになり、卒業式までの間、前籍校の授業に病室からOriHimeで参加して、登校に向けた練習をすることにしました。

最初は少し緊張している様子だったAくんも、次第に慣れた様子で意欲的に授業を受けるようになりました。クラスメートたちも最初はOriHimeに驚き、「本当にAくんなの？」などと興味津々でしたが、授業中は、まるで本当にAくんがそこに着席しているかのように全員落ち着いて授業を受けていました。

休み時間になると、子どもたちはかわるがわるOriHimeを通してAくんに話しかけ、「手をあげて」「こっち向いて」などのリクエストをしながらAくんとやりとりを楽しんでいました。一人のクラスメートは、放課後Aくんに何かを言いかけましたが、「やっぱり今度学校で話すよ」と言い、お互いに直接会えることをとても楽しみにする様子も見られました。

後日、Aくんのお母さまから訪問学級の先生のもとに、「卒業式の登校に後ろ向きだったけれど、OriHimeのおかげで学校に行くモチベーションが上がったみたいです」というお礼の言葉が届きました。このようなケースは、前籍校の先生方の多大なる理解と協力が不可欠で、課題や改善点もありましたが、OriHimeを通じた友人とのコミュニケーションにより、Aくんが登校に前向きになれたことが、大きな成果の一つだったといえます。